Vol. 3　2017 年 3 月 31 日

2016 年度報　街中ゆったりカフェ

■　目次

１．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・1
２．活動記録・・・・・・・・・・・・・・・1
３．活動記録詳細・・・・・・・・・・・・・2
４．美術作品・・・・・・・・・・・・・・・5
５．寄稿・・・・・・・・・・・・・・・・・7
5.1　反骨のジャーナリストたち　7
5.2　続　阿・阿の狛犬　8
5.3　飛騨市神岡町の瑞巌寺に「有峰薬師」を訪ねる　10
5.4　生活実態の歴史(富山の昨今)　12
5.5　邪馬台国関連　魏志倭人伝について　15
６．おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・19　end=19

会場風景

1. はじめに

本会は皆さんでおしゃべりを楽しみましょうという主旨で 13 年 11 月に発足して以来、3 年 4 ヶ月経過しました。この間、月一回の頻度でいろいろな語りにより皆さんとの楽しみを積み重ねており、その意味では充実した 3 年半かと思います。

そうこうしているうちに年度末を迎え、今年度の活動のしめくくりとして、まとめなる会報を作りました。会報からは、皆さんの声が聞こえてくるかと存じます。見ていただければ幸いです。なお、会の詳細は、HP を見てください。

http://buna.html.xdomain.jp//cafe.html

2. 活動記録 16 年度

第 11 回　3 月 22 日(水)　16:00～18:00
上市町役場 4 階　　参加者 2 人
上市まちづくりﾄｰｸ、2 回目、近藤早映氏講演で代用

第 10 回定例の集まり　2 月 28 日(水)　13:30～15:30
上市町福祉総合ｾﾝﾀｰ大研修室　参加者 4 人
町民学園閉校式記念講演
竹島慎二氏「富山県の黎明期」で代用

第 9 回定例の集まり　1 月 25 日(水)　13:30～15:00
上市町音杉公民館　　参加者 6 人
米騒動、滑川宿、立山について談義。

第 8 回定例の集まり　11 月 23 日(水)　13:30～15:00
上市町音杉公民館　　参加者
越中おわら、お祭り、水上勉の本について。

第 7 回定例の集まり　10 月 26 日(水)　13:30～15:00
上市町音杉公民館　　参加者
話題持ち寄り。

第 6 回定例の集まり　9 月 28 日(水)　13:30～15:00
上市町音杉公民館　　参加者
話題持ち寄り。

第 5 回定例の集まり　8 月 31 日(水)　13:30～15:00
上市町音杉公民館　　参加者 7 人
話題持ち寄り。江戸時代の貨幣価値と生活実態。

第 4 回定例の集まり　7 月 13 日(水)　10:00～11:30
上市町音杉公民館　　参加者 4 人
「音杉郷土塾」への参加で代用
つるぎ岳　について　講師：細川さん
つるぎ岳の写真や高山植物の写真で盛上り

第3回定例の集まり　6月22日(水)　13:30～15:00
上市町音杉公民館　　参加者
話題持ち寄り
第2b回定例の集まり　5月25日(水)　13:30～15:00
上市町音杉公民館　参加者
話題持ち寄り
第2a回定例の集まり　5月5日(水)　09:20～10:20
上市町文化研修センタ1F喫茶店　参加者5人

朝活かみいちの講演会に参加で代用
講演会：考古学が結ぶ縁～秋田から上市へ
講師　：三浦知徳さん(上市町教育委員会)
・考古学との出会い
・考古学漬けの学生時代
・流れ着いたらそこは上市
・上市での15年
・遺跡が語る上市の歴史
第1b回定例の集まり　4月27日(水)　13:30～15:00

上市町弓の里歴史文化館　参加者9人
企画展「縄文かみいち」に参加で代用
講師　：三浦知徳氏（上市町教育委員会）
第1a回定例の集まり　4月20日(水)13:30～15:30
上市町保健福祉総合ｾﾝﾀｰ　参加者5人
町民学園開校式の記念講演会出席で代用
講演会：富山県成立のころ～近代の俯瞰～
講師　：富山近代史研究会、竹島慎二氏

3. 活動記録詳細16年度

3.1 5月25日水曜13:00-15:00の定例会
会場：音杉公民館　　内容：話題持ち寄り
参加者7人

◆Horさん
・県民カレッジのこ講座を受講。公民館活動に役立てるために。
・めだかの学校に参加。全受講生4名のみ。めだかについて述べる。
・めだかそのものの勉強。純粋めだかはいなくなった。外来種の色つきめだかを見かけることが多くなってきた。
・ビオトープ作っても、外来種が入って来て、生態系うまくいかずダメ。
・めだかを公民館の池で飼いたい。子どもに見せたいので。
・公民館の鯉がイタチにやられてしまった。イタチ対策を考えている。池を網で囲うなど。でもイタチはかわいい顔。トラバサミは禁止となっている。

◆katさん
・モリアオガエルの卵をハクビシンが食べにくる。ハクビシン対策を考えている。
・イノシシについて、田んぼにきて転がりまわると、米にイノシシの臭いがつく。転がりまわる理由は皮膚についている虫を振り落とすことのよう。

◆Bunさん
東京に遊びにいった。埼玉県に行きコマ神社を見学した。
(1) コマ神社

・700 年頃に百済が滅んだ。その時に大陸からコマ人が多数日本に渡ってきた。集落を作り神社をつくった。なぜ日本が彼らを受け入れたかは彼らが優秀だったからである。そうでないと東大寺の造営はできなかったろう。特に有名なのは高麗からやってきた若光である。
・縄文や弥生でオンドルつきの住宅の跡がある。
・日本での能登などのお祭りも朝鮮系である。渡来人の影響と思える。
(2)人種
・皆さんでの討論：挑戦も日本も同じ人種。何で朝鮮系が忌み嫌われるのか。日本人はあちこちから渡来してきた方々の混合。中国南部や北部の方々がやってきたというミトコンドリアの分析結果がある。、さらにいえば、人類はアフリカにいた一人の女性を母親としている。百済の姫が点お受けに嫁いだとも言われている。

◆Yam さん
　Ｇ７環境相会議にあわせて 5 月 14,15 日にサンシップ富山や県庁広場にてアースデイがあった。これに参加したので話したい。
(1)足立原氏と向井氏との対談。ﾃｰﾏは「今が未来」である。足立原氏の話を記す。
・人間が生きていくには循環の考えしかない。
・(大沢野の山間部にて雑草対策で除草剤を空中散布する行政側の施策に対し、環境汚染防止として空中散布をやめさせ、手作業で草刈を実施した。これを草刈十字軍運動と呼ばれている。企画者は足立原先生である。)
・空中散布反対だけではダメで、何かをすべきとして草刈十字軍をやった。
・自然保護という表現居は問題あり。自然を上から目線で捉えている。われらは自然の中にいることを認識していない。
・(種々の運動について) 物事はわかりやすく、楽しくして人の心に響くようにすべき。
・持続可能が大事。
(2)アーサービナードさんの講演会。
　エリックカール作、ビナード(日本語)翻訳の絵本「ホットケーキ出来上がり」の本について、講演内容を述べられた。氏は本を朗読された。皆さん、うっとりと聞き入っていた。なお、話の内容は、子どもがホットケーキを食べたいと母親に言ったところ、小麦、卵、ミルク、ジャムを用意するようにと言われ、麦畑で麦を収穫し、粉作り小屋で粉にし、などの話があり、最終的においしくいただくというものである。
・食べたいというとどこかで材料を買ってきてすぐ調理というのが現代の考え。ところが、食べたいものも自然界からもってくるというもの。いわばものは製品ではなく、生物とのかかわりのもの。いろんなかかわりで食が成り立っていることを理解させることが絵本の主旨である。(いってみれば、食育に西部の命を受け継ぐといったことをかもし出すような主張なのであろう。)
・ビナードさんは英米文学の人で日本語のまったく話せない状態で日本に来た。日本に来てびっくりしたことは、文字の多さ(ひらがな、カタカナ、漢字)、漢字の読みとのこと。例えば、石はいし、せき、こくと読む。これは言語の多様性というよりも文化なのであろうと。

◆Mas さん
　(謙遜して) テーマを持って勉強していないことが分かった。勉強したいと思う。
(1)自然環境
・共生と言う観点では、蛍について寂しい思いを持っている。柿沢ではいなくなった。子どもに蛍のことを教えられなくなった。
・敷地内の木を何本も切った。樹齢は 140 年ものもあった。木を切ると、日陰なくなるので蛍はせいそくできなくなってします。
・(嘉藤氏は大岩で 200 年樹齢の三本杉をきらずにのこしている。)
・朝日新聞では屋敷燐をのぞんでの剣岳の展望として写真を掲載していた。そこは自分の屋敷燐である。
・屋敷林の維持は大変。林は見ごたえあるが近所に迷惑だから。倒木、枝落とし、スンバが。
(2)上市に失望
・各種総会にでている。失望した。世代交代が必要。しかし今はながく務める方が多い。しかも 20 年もという例もある。
・郷土を愛するのは個人ではなく皆さんの力を合わせて

やるべし。次世代を育成しながら、各自がそれぞれの役割を持って。
・若い人が後を継がなくなっている。まずい。
みんなで作る街である。
・（文山さんから）上市は歴史を大事にしていない。上市の観光パンフでは歴史を扱ってはいない。

◆To.ma さん
　立山寺に行ったとき、立山寺の歴史といった本をもらった。北日本新聞が長く取材していた資料を基に編集したとのこと。大変貴重な本である。
　上市の三大霊場として、穴谷、大岩の日石寺、眼目の立山寺がある。どれも歴史がある。今のうちに主順記録をしっかりとまとめて世に出して欲しい。

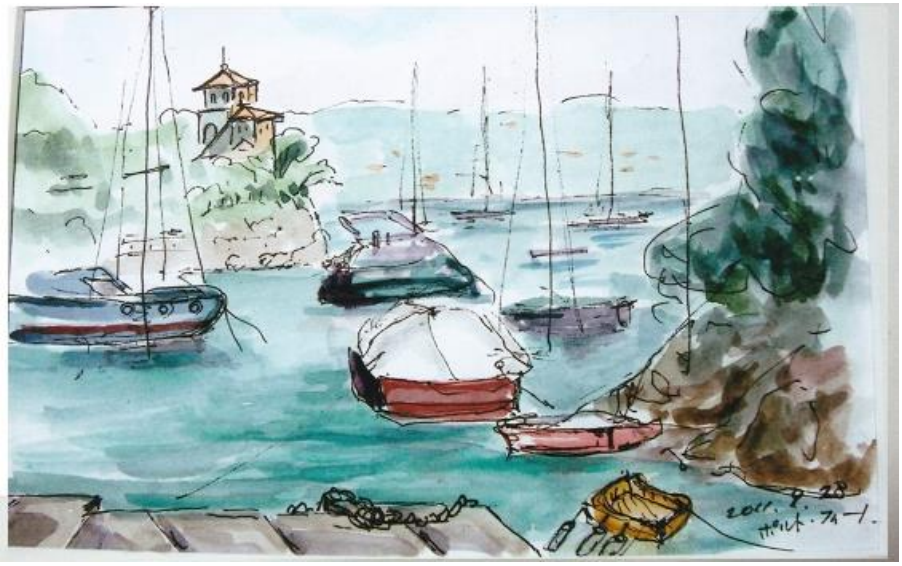
3.2 6 月 22 日水曜 13:00-15:00 の定例会
　会場：音杉公民館　　内容：話題持ち寄り
　参加者 4 人
内容
◆Tm 氏
(1)上市町教委の M さんの講演会が 6 月 16 日にあった。そのときの感想をのべられた。
・黒川遺跡；古寺域を M 氏一人で当遺跡の古寺行きで草刈をがんばる。
・立山；都から来ると立山で行き止まりと捉えたという。
(2)早月川と立山川について
・立山川をさかのぼり、室堂乗越にでる。
　このルートは立山の硫黄の運搬ルート。
・硫黄　→　焔硝の材料。動運んだか分からないが五箇山に密かに。
　　→　着火促進のために多様。
　　今はガスバーナーでまきに着火。
・早月川折戸近くの下田集落に金山有。いまでは観光用に中に入れるという。
(3)神社について
　近くのお宮さん（上野神社）の役付きになった。いくつもの神社を調査している。
・上野という名前は河岸段丘の上ということらしい。
・神社の名称　明治に神社合併したところは村の名前が多し。
・そうでない元からの神社には村の名とはなっていない。
(4)日本書紀や古事記
　日本書紀や古事記がいつ頃に書かれたのか、その背景などについて、
歴史的観点から述べておられた。よろずの神さまについても、
説明がありました。

◆Bun 氏
大山には有峰ダム建設で有峰部落が廃村になり、村民は大山と神岡に移住した。
神岡瑞岸寺薬師堂にはそんな村民が仏像を設置したらしい。そんな話をされていた。

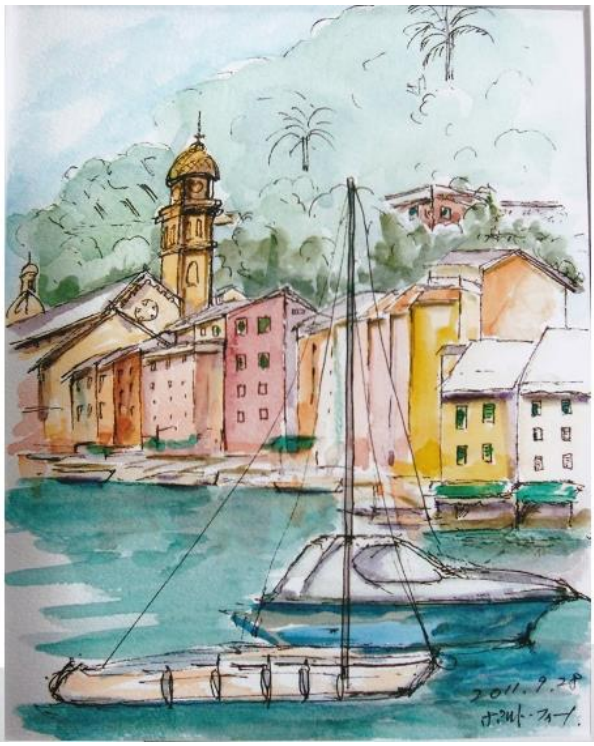
3.3 16 年度毎月実施の「ゆったりｶﾌｪ」における話題
　各回のｶﾌｪにおいては、議事録を作っていないので、編者の記憶に基づいて思い出して記録をつくった。
以下に記す。
・竹内文書：
　　信憑性に関してどうか。
・立山開山：
　　一人の力でやれたのかどうか。
・石動山
・上市町の低い山：
　　風情がある。
　　ハゲ山では種部落が一望できる。
・米騒動：
　　民衆蜂起として捉える。
・生活実態の歴史：
　　貨幣の価値について近世と近現代で比較。
　　米の量と価格を引き合いに出して。
・北国街道と上市街道：
　　街道を軸に各街の生活模様を整理するプラン策定
・富山の特徴：
　　経済活動や人的構成などには百分の一の規則。
・文化財建築：古さを評価することの意味

4. 美術作品

Kat 氏作品



イタリア　ポルトフィーノ



イタリア　ポルトフィーノ

スイス　ソーリオ村

フランス　トーレット

フランス　トーレット

フランス　サンポールヴァンス

5. 寄稿

5.1　ｼｬｷｯﾄ情報 158 号　巻頭言　　2017.02.19　　yam 氏

反骨のジャーナリストたち

『米騒動とジャーナリズム』を読み、富山の米騒動が全国的な動きに至る背景に、横山源之助、細川嘉六、井上江花など民衆側から熱心に発信したジャーナリストたちがいたことがわかった。権力側は民衆だけでなく徐々に報道への弾圧も強め、新聞記事部分的削除、空自のままでの発行や記事差し止め等を行った。メディアの委縮が進み、先の大戦では大手新聞社が営利のために翼賛体制に加担し、敗け戦を大勝利と報じ続け、犠牲者を増やしていった。その大罪は許し難い。

最近、米新大統領陣営が選挙戦で発した「fake news（偽情報」が話題になっているが、嘘は今に始まったことではない。BS 世界のドキュメンタリー『すべての政府は嘘をつく』を視ると、ベトナム、イラク戦争等々は、巧妙に仕組まれた嘘から始まったことがわかる。

隠された不都合な真実を明らかにしたのが、独立メディアだ。報道の自由を確保するため、命の危険も経営も度外視して行動するジャーナリストたちの存在が大きい。Ｉ・F ストーンは、「70 年近く政府の記録を掘り起こし、欺瞞を暴いてきた。また、商業メディアの偽善と馴れ合い、嘘を暴いてきた。代替メディアこそ、本物のジャーナリズムだ。」と言う。また、[DEMOCRACY NOW！]のエイミー・グッドマンは、「必要なのは権力に対抗する勢力、権力の行き過ぎを正せるのはメディアだけだ」と語る。

グレン・グリーンウォルドたちは、米国家安全保障局（NSA）元職員スノーデンの内部告発を受け、世界に発信した。映画『スノーデン』では、世界中が米国の監視網下にあることを警告している。（ストーン監督曰く、「フィクションだがかなり事実を再現している。」）実際に日本でも工作活動をしていた彼によると、監視網はテロ防止目的ではなかったとのこと。想像を絶することが将来起きかねない。なにしろ狭い日本に 54 基もの原発があるのだから。

今なお福島第一原発の危険性は一向に減少していない。芸人の“おしどリマコさん”は、東電定例記者会見に連続参加しプロの記者より鋭い質問をして、隠されたデータを明るみにするなど、被災者から感謝されている。しかし、国内では殆ど発表の場が与えられず、生活は苦しいという。そんなマコさんをドイツのメディアが招待。何の制約もなく堂々と話をしている彼女だ。マコさんが平和・協同ジャーナリスト基金賞を受賞した。その式で『米騒動とジャーナリズム』の著者の一人である金澤敏子さんが隣に並ぶ映像を視て感激した。命と平和と自由を守るため、真偽を見極める力をつけるとともに、本物のジャーナリズムの担い手を応援し、幸せな未来に繋いでいきたい。

続「阿・阿の狛犬」

文山　純子

１、狛犬や仁王像

一般に狛犬や仁王像等は、「阿・吽」で対になっています。阿は口を開いている、吽は口を閉じている姿です。これは万物の始めと終わりを表していると言われています。　　（明解国語辞典　金田一京介監修）

先に富山市山王町の「日枝神社」で大陸伝来の「阿・阿」の狛犬を見ました。私は新しい発見と思い『大山の歴史と民俗第19号』に発表しました。

その後『北陸石仏の会々報第49号』が届きました。尾田武雄さんの「砺波型狛犬」の報告が載っていました。もちろん「阿・阿」の狛犬でした。一部紹介します。

２、「砺波型狛犬　尾田武雄」　『北陸石仏の会々報第49号』より

「・・狛犬に銘があるのは多くはないが、個性ある石工を一人紹介しておきたい。

旧庄川町示野神明宮[大正十二年九月][石工井波森野善四郎]。庄川町三谷水宮神社[大正十五年二月建立][石工井波森野善四郎]がある。南砺市野原神明宮には[大正八年八月二十九日][石工井波森野善四郎]。同市広安平田社にも[石工井波森野善四郎]がある。ほかにもまだ多くあると思われる。森野善四郎作の狛犬は、ずんぐりと堂々とし、しっかりと足を地についたスタイルで首を屈め、左右とも阿形で口を開けているのが特徴である。富山市婦中町鵜坂の鵜坂神社境内にもこの狛犬がある。あまりにも類例がなく特徴的であるので、砺波型と称したい」と書いてありました。これを読んでさっそく鵜坂神社の狛犬を見てきました。やはり「阿・阿」の狛犬でした。また新しい発見でした。狛犬の歴史も気になりました。

「富山市大山歴史民俗資料館」発行の[大山の文化財めぐり]一有峰の狛犬一の項に狛犬の歴史が載っていたので紹介します。

３、有峰の狛犬　　[大山町文化財めぐり]より転載

「狛犬はおもに神社におかれましたが、寺にもおかれています。

辟邪(へきじや)といって心のねじれやよこしまなものが入り込むのを防ぐためにおかれた守護獣(神)です。原点は百獣の王と恐れられたライオン(獅子)で、エジプト・インドを経て中国で獅子になり、わが国で狛犬となりました。

日本では平安時代にはじまり阿（開口)、吽(閉口)の２体で１対となっています。角を持つ吽が狛犬で阿の獅子とは区別されましたが、鎌倉・室町期

ころから吽の角が失われました。屋内のものは木造で屋外のものは石像が多く、江戸時代以降さかんに作られました。

有峰の狛犬は、東谷宮の見世棚に４対８体がおかれていました。通称サル、シシ、ヌエ、クマといわれています。それぞれ鎌倉時代から明治時代にかけて作られました。作物を荒らす動物の退治を願って彫られたともいわれています。有峰は、大正９年(1920) 県有地として買収され廃村となりました.

狛犬は紆余曲折を経て松本市立博物館に収蔵されていました。しかし、平成１２年７月に松本市より７７年ぶりに帰郷し、資料館に展示されています」

以上簡単ですが報告します。

鵜坂神社の狛犬「阿・阿」

鵜坂神社拝殿前狛犬

2002 (h4) 7. 27
松本市立博物館時代の
有峰狛犬　平井一雄撮影

鵜坂神社社号標・鳥居

5.3　飛騨市神岡町の瑞巌寺に「有峰薬師」を訪ねる

大山の歴史と民俗、第 20 号、2017 年 3 月、pp.79-80、大山歴史民俗研究会　　寄稿：文山氏

飛騨市神岡町の瑞岸寺に「有峰薬師」を訪ねる

文山純子・松井兵英

有峰村が湖底に沈むと決まったとき、住民たちは富山市や旧大山町、旧大沢野町、また文化や血縁で関係の深い飛騨地方へ移住したという。これらのことは『有峰物語』飯田辰彦 著 NTT 出版 1995 や、『有峰の記憶』前田英雄 編 桂書房 2009 に詳しい。

村の人たちが信仰した薬師岳頂上の「岳の薬師」と、前立ての「里の薬師」の像は村の菩提寺であった麓、上滝の曹洞宗瀧脇山大川寺に遷座されて、五月の第二日曜日の薬師大祭で開帳され、「岳の薬師」は六月の山開きに薬師岳頂上のお堂に安置される。

神岡にも、有峰から移住した人たちが伝えた「有峰薬師」があると聞いて訪ねた。道の駅や江馬氏下館に近い殿秀山瑞岸寺は臨済宗妙心寺派のお寺で天文４年（1535）江馬氏の開基と伝える。立派な石垣の境内には、作家・江馬 修（えま なかし）の墓や、本堂に向かって左側に地を這う奇木「臥龍の楓」があり、有峰薬師堂や地蔵堂、多くの石碑が建っている。閑栖和尚様の都竹清隆師は歴史研究で飛騨中世史の研究者たちとの交流や、研究誌『飛騨の中世』の編集に参画されている。

境内の有峰薬師堂には三つの扉があり、中には多くの小仏像やお札が祀られている。そのうち中央の円形光背のある木彫りの薬師如来立像と一番右側の木像が有峰西谷から遷されたものと言われる。中央の像は新しく見え、円光は後に修理のとき付けられたとのことで、背面に「越中片掛住、薬師如来（？）田島輔七郎　大正五年七月吉日之作」と三行に刻字がある。都竹師は「片掛在の人が彫って有峰へ寄進したか、依頼されて納めたものか。とまれ、飛騨へ移住した人たちの心の拠り処であったのだろう。」と話された。有峰薬師堂は初め裏山中腹の鉄塔付近の平地にあったが、麓の愛宕堂地に移され、再度この境内のお堂に遷された。他の小仏像は近所の人たちが納めたものだそうである。

また地蔵堂には「うどん地蔵」と呼ばれる背の高い像の他に、多くの石仏が安置されているが、「文政十三寅？・・・」と光背に文字の見える合掌石仏も有峰の西谷から遷されたもので、もとは裏山の薬師参道脇に置かれていたそうである。

有峰からは福山、橋本、川口、野口分家、城野本家・分家などが神岡に移住され、移住当時の人たちはもう亡くなられたが、川口さん宅は今でも正月には欠かさずお酒とお賽銭とを瑞岸寺に持参されているとか。近年も、瑞岸寺主催で薬師様をお連れした「里帰り有峰バスツアー」を実施されるなど、同寺と有峰の地とは関係が深いようである。

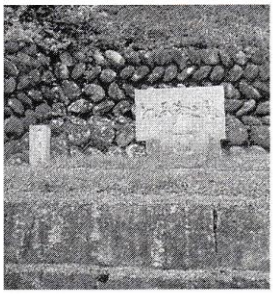
南西に 4 ㎞くらい離れた小萱地区にある小萱薬師堂（現存する和様式では岐阜県最古の木造建築、室町時代初期、国指定重文）も瑞岸寺の飛地境内にあり、江馬氏下館の裏鬼門の守りだったのではないか？と言われる。

都竹師は、飛越往還を示す陰刻がある鰐口（越中国新河郡文珠寺に寄進され、飛州吉城郡富安郷内五社宮に遷り、現在再び文珠寺の宝寿院蔵）も研究されて、「飛騨では越中と異なる見方もあって、もっと越中の研究者たちと交流したい。」と話されていた。

瑞岸寺訪問の写真

殿秀山 瑞岸寺 参道

同寺の由来



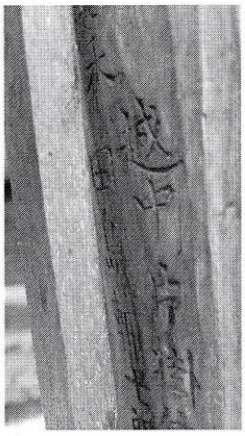
江馬 修の墓

奇木 臥龍の楓

境内の有峰薬師堂

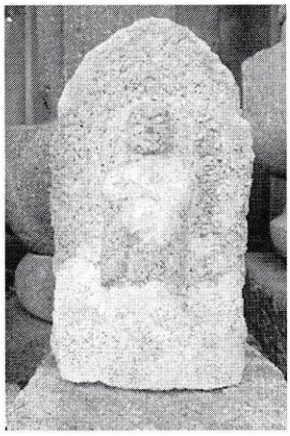
有峰薬師如来立像

薬師如来像背面

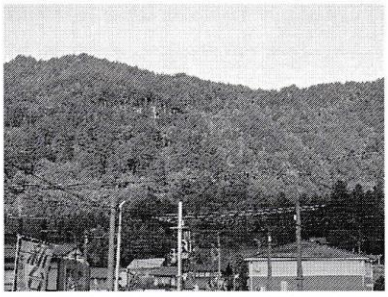


作者の刻字

有峰からの木像

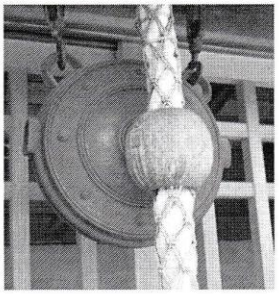


有峰からの文政石仏



瑞岸寺の裏山
（中腹の平地に薬師堂があった）

飛地境内の小萱薬師堂
（室町時代初期、国指定重文）



瑞岸寺六地蔵堂の鰐口
（これは新しいもの）

生活実態の歴史(富山の昨今)

1. はじめに

歴史といえば一般には支配層の政治史をさすためか、一般人にとって歴史はつまらないものという捉え方が多い。しかしながら、郷土の歴史となると話は別で、自分らの歴史としての捉え方が自然と湧き上がってくる。例えば、街のアイデンティティは歴史そのものであるとか、歴史ドラマは過去へのタイムスリップとかで楽しまれている。

ここでは、上述の観点で「楽しむための歴史」を生活の面から検証したいと思う。具体的には、生活実態の昨今ということで歴史を捉えることにしたい。

2.　歴史の意味

歴史ドラマの鑑賞では、自覚しようがしまいが当時の生活を自分らの生活をダブらせてドラマを見ている。例えば、お蕎麦屋さんで蕎麦をすすれば何文か、今でいえば何円かといったように、生活環境のもとで時代に浸っている。そんな時、生活環境の昨今について、明確な対比データがあればとか、人の意識構造も変わるのかどうか、などと考えだすと、歴史というものがより一層身近に感じられてくる。

また自分の周辺についても歴史を感じる時がある。これは多分に自分史といえるものでもある。多くの方々の自分史が郷土全体で集積するなら、結果は郷土史ともいえる。歴史とは、多分にそんな自分たちの歴史の匂いのする個々の歴史そのものなのである。

4. 米基準の生活

戦国時代の何万石、何貫、何両は、今のお金にするとどのくらいか、いつも気になっていた。そこで、中世・近世の経済の要であった米に着目し、米の価値の検証や貨幣価値について主に述べることにしたい。まずは、米について述べる。

4.1　米による生活、米量と農地面積

中世・近世の経済価値は米の量で計っていた。当時は、人間の米消費量を容積で計量し「石」（こくと称する）という単位を使っていた。

まず、容積について述べる。

（俵：ひょう、斗：とう、升：しょう、合：ごう）

1 俵＝4 斗=60kg=72 ﾘｯﾄﾙ（江戸時代は 3.5 斗）

1 石＝10 斗=2.5 俵＝150kg＝180 ﾘｯﾄﾙ

1 斗＝10 升=15kg＝18 ﾘｯﾄﾙ

1 升＝10 合＝1.5kg＝1.8 ﾘｯﾄﾙ

1 合＝茶碗 2 杯＝150g＝0.18 ﾘｯﾄﾙ

次に石の定義を述べる。

1 石　＝　1 人が 1 年間食べるコメの量

360 日×3 合/日＝約 1000 合

（1 日 0.4kg）

米の重量 150kg

1 石＝2.5 俵

次に農地の広さについて述べる。坪(つぼ)は皆さんにとってはなじみ深い。坪の他には町(ちょう)、反(たん)の単位があり、それぞれの換算は以下の通りである。

1 町＝10 反＝ほぼ 1 ﾍｸﾀｰﾙ＝

0.01km2=100m*100m

1 反＝300 坪＝ほぼ 10 ｱｰﾙ＝1000m2=10m*10m

1 坪＝3.3m2

収穫量と農地面積については、

1 石＝1 反

の関係がある。米 1 石は偶然にも農地 1 反で収穫できる量なのである。（今は生産性向上、詳しくは 4.3 節）

このレートで行くと、1 万石は 1 万反＝1000 町となる。富山県域では 55 万石であるので、耕地総面積は

5.5 万町＝55, 000ha＝550km2

となる。これは富山県面積の 13%あたる。2011 年度調査では富山県の水田は 57, 000ha であり、妥当な数値である。

4.3　米の価値

収穫量について、近世と現代とで比較してみよう。近世では、１反の米量は１石＝150kg であったが、現代では 3.5 倍程に生産性能が上がり、(米の収穫量は)１反＝3.5 石＝8.8 俵＝530kg である。

米の１人当たり 1 年間の消費量は、近世では１石 150kg であったが、近代では二俵(0.8 石)120kg であり、平成に入ってからはさらに減って１俵 60kg 程度となっている。今の生活を見ると、朝にパン、昼にうんどん、夜にやっとご飯、という食生活なら、米消費は一人一日１合くらいであり、米消費量は確かに近世の 1/3 程度となっている。

米の値段については、平成初期のころまでは、一俵 2～3 万円が、最近は１万円にも低下している。生産量が上がっているうえに、消費量が落ちているため、値崩れとなっている。ここでは値崩れ前のレートを念頭において、米の値段を記すことにする。

１石＝6.3 万円、１俵＝2.5 万円

なお、この値は今の米余りの時代でもスーパーの 5kg 米が 2000 円(高いものでは 3000 円)であるので、１石 150kg=6 万円で妥当である。

5. 近世の貨幣価値

5.1　貨幣

貨幣については貫(かん)や両(りょう)という重さで価値が計量されていた。その後、重さと貨幣の価値の乖離が始まって、貫や両は貨幣の単位となっていった。

5.2　貨幣の種類

貨幣には、金貨、銀貨、銅貨(銭貨)がある。金貨は小判として世間には通っており、通貨単位には、両のほかに分(ぶ)、朱(しゅ)、文(もん)があり、換算は以下のとおりである。

１両＝4 分　１分＝4 朱　１朱＝250 文

金１両＝銀 50～60 匁＝銭 4000 文

銀１匁＝銭 80 文

交換レートについては 5.2 節を参照されたい。

銀貨については、匁(もんめ)が単位である。銀貨は重さが固定されていない銀の塊であり、使用際にはいちいち重さを計測したという。丁銀(ちょうぎん)は 150g 前後(41 匁)、豆板銀(まめいたぎん)は 5～20g、露銀(ろぎん)は 1g の塊である。

銅貨については銭貨ともよばれ、庶民はもっぱら銭貨を使用していた。そのころ出回っていた銭貨は寛永通宝であり、１枚が１文であった。

5.2　貨幣価値

貨幣価値換算については、何に着目しての昨今比較かにより値が結構異なってくる。昨今比較の対象としてよく引き合いにだされるのは、米、大工給金、蕎麦である。

<1>　米に着目

今の米は 5kg で 2,500 円(少し高めに設定)として 150kg１石は 7.5 万円となる。江戸時代での１両で買えた米の量は、江戸初期で 350kg(2.3 石)、中期で 150 kg(1 石)、後期で 15～30kg(0.1～0.2 石)といわれている。江戸中期に設定して１石は１両であること。今の米が 5kg で 2,500 円として 150kg１石は 7.5 万円となること。これより 1 両 7.5 万円。(p2 にある私の試算では 6.3 万円)

<2>　庶民の暮らしに着目、両から文へ

貨幣価値の試算として、両よりも文の単位で庶民の暮らしで実際の経済活動を評価し検討する。まず両を文に替えてみる。これも、金相場で市場変動していたとされているが、一般には１両は江戸時代を通して 4000 文としておくことができる。実際には時期によって以下のように変動していた。

江戸初期では　2000 文、江戸後期では　6500 文

江戸時代全体としての概算値　**１両＝4000 文**

<2>　庶民の暮らしに着目、文と円

ここで、日常生活を今と昔とで比較する。例えば大工の給金(日当)は銀５匁４分であり、いまは 1.5～2 万円程であるので、１匁（=100 文）＝2500 円程といえる。（１文＝25 円）

また、蕎麦１杯の値段は元禄時代では８文(16 文の説も)であり、今では 500 円相当であるので、１文＝70 円程ともいえる。こうしたデータにより、生活実態の

昨今比較からは　　＝昭和 30 年頃 2,000 円　＝現在の 20,000 円

１文は 25 円程

が無難なようである。

これより、上述の換算で１両を 4000 文とすると、

１両＝100,000 円（10 万円）

１貫＝0.25 両＝2.5 万円

となる。

5.4　明治時代の貨幣

明治初期には　**１両＝１円**　で交換されていた。本来ならば､先に述べたように１両 10 万円として１両１円のレートにはなっていない。幕末のころはインフレで物価高騰のため、両が極めて低く評価されたのであろう。（また金貨の質が低下していたことにもよる）

公務員給金やそばの代金など生活実感から割り出された一般的なデータにより、円について価値の時代的変遷を記すと；

明治の１円　＝　２万円

明治前期１円

＝明治後期２円　　＝大正～戦前４円

11. 人物史

歴史は事の歴史ではなく、人物の方が面白い。戦国時代に登場する人物は、歴史ファンでなくてもよく知られている。その一方、郷土に地味に貢献した人物はあまり知られてはいない。富山では佐々成政や前田の殿様の名前が出ても、現代の人物として、(経済人の)大谷氏、金岡氏、とかいっても知らない方ばかりである。要は、**経済人や技術者では名が残りにくい**ということである。

12. おわりに

生活実態に着目すれば、歴史的に生活の実像化が可能となって、ひいては歴史は日常的認識そのものという気がしてくる。また、貨幣数量に着目して歴史の縦断的な流れを把握するなら、時代を読むことさえ可能となってくるといいたい。と同時に。**昨今社会の同時体験が可能とならば、歴史がますます身近なものになってくる**ものである。これをもってまとめとしたい。

付録　米騒動について　米騒動 1918

富山県では、明治期、米商人が富山の安いコメを買い占め、県外で高く売って巨利を得ていた。1918 年（大正 7 年）政府のシベリア出兵を機にコメの投機的買い占めが始まり、米価が高騰した。日頃の米価高騰に苦しめられていた魚津の主婦たちが港に停泊の米運搬船へのコメ積み出しを阻止した。これがたちまちのうちに全国に知れわたり、各地で民衆が蜂起したが、軍隊によりすべての騒動が鎮圧された。

民衆の大抗議運動として特筆すべきこの騒動は、県内ではあまり触れられてはいない。単なる一事件という捉え方しかされていない。

邪馬台国関連　魏志倭人伝について

いつも、声をかけていただきながら、何も応答していませんでしたのでその罪滅ぼしに、研究でも評論でもなく単に感想あるいは解説みたいな物ですが、寄稿したいと思います。ご覧ください。

いつも例会の記事を拝見していますが、三角縁神獣鏡やら邪馬台国の話やら歴史サロンなどで定番の題材が見えました。以前から思っているのですが、「魏志倭人伝」の話は話題になるのに、その出典の大本、「三国志」については語られないというか、知られていないという印象を受けます。中には、「三国志」と「三国志演義」を同一の書物と勘違いしている方もいらっしゃいます。「三国志演義」はあくまで小説であれが真実ではありませんし、倭人伝についても語られていません。もっとも、正史としての三国志も真実ではない記述が多いと思いますが、・・・。

そこで、その辺をちょこっと解説してみたいと思います。

『三国志』は、西晋の歴史家・陳寿（ちんじゅ）が編纂した史書です。前述のとおり、歴史小説『三国志演義』とは別物で（「演義」の方は吉川英治の小説や横光利一の漫画で有名です。）、「正史」と呼ばれる史書です。

中国では唐の頃から、司馬遷の「史記」にはじまる紀伝体の史書を「正史」と呼ぶようになりましたが、正しい史実を記録しているから「正史」なのではありません。「正史」とは、国家の「正当性」を示すことを目的として現在の前の政権の歴史を描いたものを史書と言います。そのため、歴史的事実と異なる記録をしていることもあり、記述の歪みが含まれています。（むしろ、歪みを持たない記録などないに等しい。文献の常識ですね。）

『三国志』は、魏書三十巻、蜀書十五巻、呉書二十巻という三部構成で、魏書にだけ「本紀」が設けられています。曹操（そうそう）が基礎を築き、曹丕（そうひ）が建国した魏を、漢王朝の正統な後継王朝としたいためと考えられています。

蜀を建国した劉備（りゅうび）も呉を建国した孫権（そんけん）も皇帝として即位していますが、『三国志』の中では、彼らは形式的には魏の臣下として「列伝」の中で記されています。

儒教の対外思想の中核をなす中華思想では、中華（＝中国）を支配する天子が徳を修めることによって、東夷・南蛮・西戎・北狄（とうい・なんばん・せいじゅう・ほくてき）と称される四方の夷狄（いてき）がその徳を慕って朝貢してくると考えており、朝貢してくる夷狄の数が多ければ多ほど、天子の徳は高いと評価されます。

魏を正統な王朝とみる『三国志』では、魏と国際関係を結んだ夷狄を記述するために巻三十で「烏桓（うがん）・鮮卑（せんぴ）・東夷（とうい）伝」を付けています。蜀も呉も、実際には周辺の異民族から朝貢を受けていましたが、これらの王朝を正統と見なさない陳寿は、『蜀書』や『呉書』の中に夷狄の列伝は設けていません。

『三国志』の唯一の夷狄伝である巻三十の中で、倭国のことを記した「倭人の条」（その箇所を「魏志倭人伝」と日本では呼んでいます。）は、夷狄伝の中で最多の 1983 字を数えます。

中国の正史は『史記』から『明史』まで２４ありますが（二十四史といいます）、異民族の中で日本に関する記録の文字数が最も多いのは『三国志』の「倭人の条」だけです。

それほどまでに陳寿が力をこめて「倭人の条」を書いたのには、西晋(265 –316)を建国した武帝司馬炎（しばえん）の祖父にあたる司馬懿（しばい）の功績をより際立たせたかったからでしょう。

西晋の実質的な創立者は司馬懿です。司馬懿は、208

年に赤壁の戦いがあった年から曹操（そうそう）に仕え、曹操の参謀、そしてその嫡子曹丕（そうひ）の世話役として地位を確立していきました。234 年には五丈原で諸葛亮（しょかつりょう）の死を受けて蜀の勢力をくじき、238 年には呉と連動して反魏的行動をとっていた遼東の公孫淵（こうそんえん）を討ち、魏における地位を確立しました。

陳寿は 233 年に蜀に生まれ、蜀に仕えて史書の編纂を職務としていましたが、蜀が 263 年に滅亡してしまいました。２年後の 265 年には司馬炎（しばえん）が魏の元帝から禅譲を受けて即位し西晋を建国しました。陳寿は、晋の黄門侍郎(「こうもんじろう」って、お尻の病気じゃありません。: 皇帝の諮問に応える側近。日本の官制では中納言です。水戸光圀さんで有名ですよね。）の張華（ちょうか）と春秋左氏学を極めた武将で学者の杜預（とよ）の推挙を受けて、史官として西晋に仕えることになりました。

280 年に呉が平定された後、彼は三国の史書を合わせて『三国志』を著しました。おそらく、284 年頃には『三国志』を完成させていたと推測されます。

話を戻しますが、司馬懿が公孫氏を滅ぼしたことで、東夷の国々は魏の支配下に入って、その命令に従うようになりました。特に、東夷の中でも遠方の東海の島国だった倭から女王卑弥呼が朝貢の使節を送ってくるようになったことは司馬懿の功績です。その功績を強調することで、とりもなおさず陳寿自身が仕える西晋の王朝としての正当性を強調することにもなるのです。しかも、中華思想は、天子の徳が四方に波及すればするほど、遠くの夷狄が中国に帰服すると説きます。そのためには、実態はともかく倭国は魏の都洛陽から１万７千里の彼方の国でなければならない。また、他の夷狄とは異なって礼節の備わった国でなければならない。そのため、陳寿は倭国を理念的に、しかも好意的に描いていると考えられます。ですから倭国までの道のりは、遥か彼方でなくてはならず、距離などは正確である必要はなかったのです。

中国の戦国時代は諸国が絶えず戦争を続けており、遠くの相手と手を結んで近くの敵を片付ける近攻遠交策を外交の基本としていました。(近隣の国々とトラブルを起こすのはこうした外交姿勢がいまだに続いているからとも言えます。) 三国時代においても事情は同じで、夷狄の朝貢国のうち魏が特に優遇して「親魏〇〇王」の称号を与えた国が二つあります。大月氏国と倭国です。大月氏国とは、蜀の西に位置し中央アジアからインド北部までを支配したクシャーナ王朝のことで、全盛期にはカニシカ王が仏教を保護したことでわが国でもよく知られています。魏の明帝曹叡（そうえい）は、229 年に朝貢使節を派遣してきた波調（はちょう、ヴァースデーヴァ王）を親魏大月氏王としていますが、蜀を背後から牽制するためだったと思います。

それから 10 年後の 239 年、公孫氏を滅ぼした魏を賀する使節を、東夷の倭国の女王卑弥呼が派遣してきました。当時、倭国は呉の南に位置する国であると認識されていました。呉を背後から牽制するために、魏は倭国を大月氏国に匹敵する重要な国と見なしたようで、卑弥呼を「親魏倭王」に任じ、その証として金印を与えました。実際、魏と倭国とは親密な関係にあったようです。239 年から 247 年までの９年間に、倭国から魏に４回使者を派遣し、魏からは２回使者が倭国を訪れています。後世の遣唐使の派遣が平均すると約 18 年に一回の割合だったのに比べて、魏と倭がいかに親密な関係にあったかがうかがえます。

しかしながら、中国の史書では、夷狄伝は中華の栄光を示すために書かれた部分であり、夷狄の国々の事実をそのまま記録しているわけではありません。儒教の理念に基づいて記録を取捨選択し、あるいは事実を創作して記録している箇所は当然あるはずです。

また、陳寿は『三国志』を一から書き記したのではありません。魏書には王沈（おうちん）の『魏書』と魚拳（ぎょけん）の『魏略』が、呉書には韋昭（いしょう）の『呉書』という先行する史書があり、多くはその記述に頼っています。

以上、解説と若干の感想でした。

（参考）

なお三国志は『正史 三国志』陳寿、裴松之注、今鷹

真・井波律子・小南一郎訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫 全8巻)、1992年 －1993年筑摩書房。があります。

県立図書館などで確認できます。(まともに読むとしんどいです。)

魏志倭人伝原文の訳

倭人は、帯方の東南の大海のなかにある。山の多い島によって国や村をなしている。もとは百余国であった。漢のとき中国に朝見するものがあった。いま、使者と通訳の通交するのは、三十か国である。帯方郡から倭に行くには海岸に沿って船で進み、韓国を通過して南に向かったり、東に向かったりしながら倭の北岸の狗邪韓国に到着する。そこまでが七千余里である。

初めて海を渡り、距離千里あまりで対海国（対馬）に着く。その大官は*卑狗（ヒク）といい、副官を*卑奴母離（ヒナモリ）という。絶海の孤島であり、広さは四百里四方あまりである。土地は険しく、森林が多く、道路は鳥や獣の道のようである、千戸程度の家がある。良田は無く、海産物を食べて自活しており、船に乗って南や北に行き交易をしている。

また南に千里あまり行くと、瀚海（かんかい）という海があり、一大國（壱岐）に着く。またその大官を卑狗（ヒク）といい、副官を卑奴母離（ヒナモリ）という。三百里四方の広さがあり、竹や林が多く、三千くらいの家がある。（対馬と比べて）やや田んぼがあるが、自国ですべてを賄うことはできない。この国もまた船に乗って南や北に行き交易をしている。

また南に千里あまり行くと、*末盧（マツロ）國に着く。四千戸あまりある。山と海にはさまれて生活している。草木が繁茂しており、歩いている前の人が見えない。魚や鰒（あわび）好んで獲っている。水が深くても浅くても関係なく、みんな潜って獲っている。

東南に向かって陸上で五百里行くと伊都国に着く。大官を爾支（ニキ）副官を泄謨觚（セツボコ）、柄渠觚へイキヨコ）。千戸あまりある。代々（*）王がいるが、皆女王の国の属国である。（帯方）郡からの死者が往来するときに常にとどまるところである。

東南に向かって百里行くと奴国に着く。大官を兜馬觚（ジバコ）、副官を卑奴母離という。二千戸ほどある。東に行くと不弥国に百里で着く。大官を多模（タモ）、副官を卑奴母離という。一千戸ほどある。

南に向かって水上をいけば二十日で投馬国に着く。大官を彌彌（ミミ）副官を泄謨觚彌彌那利（ミミナリ）五万戸ほどある。

南に向かうと邪馬壱國（邪馬台國？）に到着する。女王の都である。水上ならば十日、陸路ならば一月（もしくは「水上を10日、さらに陸路を一月」）かかる。官を伊支馬（イキマ）、次を彌馬升（ミマショウ）、次を彌馬獲支（ミマワキ）次を奴佳鞮（ナカテイ）という。およそ七万戸ある。

女王国より北は、おおよその戸数や距離を記すことができるが、その他の国ははるか遠く、詳細はわからない。

次に斯馬國有り。次に己百支國有り。・・・・略

次に奴國有り。

これは女王の国の境界が尽きるところである。

その南に（女王の国の南か）狗奴（クナ）国があり、男子を王としている。その官を狗古智卑狗（クコチヒク）といい、女王には属していない。

（帯方）郡より女王国まで一万二千里である。

男子は大小にかかわらず皆、顔や身体中に入れ墨をしている。古来より倭国の使者が中国にくるときは、自ら大夫と称していた。夏后小康の子が会稽（）に封ぜられると、髪を切って入れ墨をして魔物の害を避けた。今、倭の水神は海に潜って魚、蛤を獲っている。 同じく入れ墨をして大魚（サメなど？）や水獣をさけるのである。それを飾りとしているケースもあるようだ。諸国の入れ墨は様々あり、あるものは左、あるものは右、その大小などで尊卑をわけることがある。

その行程を計測すると、倭国は会稽の東にあることになる。その風俗は乱れていない。男子は皆かぶりものをせず、木綿を頭からかけ、衣服は横幅衣でただ結んで束ねてつなげ、ほとんど縫っていない。女性は髪を結っていて、衣服は中央に穴をあけそこから頭を出して着ている。

稲や苧麻を植え、蚕を育て、紡いで細い麻糸、綿、絹織物を作っている。その他は、牛、牛、虎、豹、羊、鵲（セキ）はいない。武器は矛、盾、木の弓を用い、弓の下を短くして上を長めにしている。竹の矢に鉄のやじり、骨の矢じりを用いる。もののあるなし（生活用品など）は儋耳（たんじ）・朱崖（しゅがい）と同じである。

倭の地は温暖で、冬でも夏でも生野菜を食べる。みな裸足である。居室があり、父母兄弟は寝るところは別々である。朱丹を体に塗っている。中国で粉を用いているようなものである。飲食（の食器）には高杯を用いて、手で食べる。人が死んだときは、葬るのに棺はあるが槨はない。土を盛って塚を作る。死後十日あまりは喪に服す。そのときには肉をたべず、喪主は大

声でなき、他の人達は歌ったり踊ったりして酒を飲む。喪があけると、家中総出で水中で清め、練沐のようにする。

海を渡って往来し、中国に行く場合には、常に１人のものに、髪をとかせず、しらみをとらせず、衣服が垢で汚れたままにさせ、肉を食わせず、婦人を近づけず、喪に服している人のようにしておく。これを名づけて持衰（*）という。もしその航海が安全であれば、その者に奴隷や財宝を与える。もし病や暴風の害に遭えば、この者を殺す。その持衰が謹しまなかったからである。

真珠と青玉をよく産出する。その山には丹（*）がある。木は、くす、とち、くすのき、ぼけくぬぎ、すぎ、かし、やまぐわ、かえでがある。竹は篠竹、やだけ、かづらだけがある。しょうが、たちばな、さんしょう、みょうががあるけれど、食物として食べることを知らない。大猿や黒雉がいる。

その習俗では、行事や往来で何かあれば、すぐに骨を焼いて卜占して吉凶を占い、あらかじめその結果を告げる。そのことばは中国の令亀の法（*）と同じであり、ひびをみて兆候をみる。集会や座るセキには父子男女の区別はない。人々は酒を好んでたしなむ。偉い人にあえば、ただ拍手するだけでひざまずいて拝礼するかわりとする。

倭人の寿命は１００年、あるいは８、９０年。貴人は妻を４、５人、一般人でも２、３人。婦人は淫らではなく、嫉妬などをしない。窃盗などはせず訴訟も少ない。法を犯した場合は、軽い場合はその妻子を取り上げ、重い場合は、一族を没収する。尊卑には様々な序列があり。たがいによく服従する。

租税や賦を徴収し、その倉庫がある。国々には市があり、そこにあるものと無いものを交易している。大倭（*）にこれを監督させている。女王の国より北には、特別に一大率（*）を置いて諸国を監督させている。諸国はこれをおそれはばかっている。この役目は常に伊都国が担う。国のなかで刺史のような役割をしている。王（女王？）が使者を使わして洛陽の都や帯方郡、諸韓国に派遣したり、郡から倭国に使者が派遣されるとき、いつも港に出向いて捜索して、文章を伝送したり、賜り物を女王に届けるのに、間違いがないようにさせた。

一般人が貴人と道路で出会った時は、後ずさりして草の中に入る。言葉を伝えたり、説明したりするときには、うづくまったり、ひざまずいたりして、両手は地面について、つつしみうやまう姿勢をとる。対応する答えは「噫（あい）」といって、中国語で「然諾（わかりました）」の意と同じである。

その国も、もとは男子を王としていた。そのような状態が７、８0年続き、倭国は乱れて、互いに攻撃しあうようになり、幾年かが過ぎた。そこで、１人の女子を共立（*）して王にした。名前を卑弥呼という。鬼道（*）を使いこなし、人々を惑わせる力があった。すでに年長であったが、夫はなく、弟がひとりおり、補佐して国をおさめた。王となってから見たことがある者は少なく、千人の侍女をはべらせていた。ただ男子がひとりいて、食べ物を運んだり、言葉をつたえたりして、居室に出入りしていた。宮室や楼観は城柵を厳重に設け、常に兵隊を配置して守っていた。

女王の国の東には、海を渡って千里ばかりいくとまた国がある。これも皆倭と同一の種族である。また侏儒（*）国がその南にあり、人々の身長は３、４尺である。女王の国から四千里ばかり離れたところである。また裸国・黒歯国があり、船で一年行くと到着できる。倭の地を詳細にみると、大海の中の離れた島の中にあり、離れたり連なったりしている。一周まわると五千里くらいである。

景初二年（*）（２３８年）六月、倭の女王は大夫の難升米たちを帯方郡に派遣して、天子に朝貢したいと求めた。太守の劉夏は使いを派遣して都（洛陽）まで送らせた。

その年の十二月、魏の皇帝は詔を下して倭の女王に答えて言った。「親魏倭王卑弥呼と制詔する。帯方の太守劉夏が使者を派遣し、汝の大夫の難升米・次使都市牛利を送り、汝の献上した男の奴隷4人、女の奴隷6人、班布二匹二丈を持ってこさせた。汝の住んでいるところは遥かに遠いところであるにもかかわらず、使者を遣わし朝貢してくるのは、汝の忠孝を示すもので、わたしは汝をたいへん哀れむ。今、汝を親魏倭王として、金印紫綬を与えよう。それを封印して帯方郡太守に持たせて汝に与えよう。汝の種族を安んじて、孝順に勉めよ。

汝の使者である難升米・牛利は遠く大いに苦労をした。難升米を率善中郎将、牛利を率善校尉として銀印青綬を与え、引見してねぎらい、金品を与え還そう。絳地交竜錦五匹・絳地縐粟罽十張・蒨絳五十匹・紺青五十匹を汝が献上した貢物に対して贈ろう。さらに特別に紺地句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十匹．金八両・五尺刀二口・銅鏡百牧・真珠・鉛丹各々五十斤を与えよう。みな封をして難升米・牛利に託す。国に帰ったならば、記録して受取り、汝の国中の人々に示して、わが国家が汝の国を哀れんでいることを知らしめよ。そのために丁重に汝に良いものを与えるのである。

正始元年（240年）、太守である弓遵が、建中校尉の梯儁らを派遣し、詣書・印綬を捧げて倭国に到着して、倭王に与え、詔をもたらし金帛・錦罽・刀・鏡・采物を下賜した。それに対し倭王は使者を送り、上表して詔に感謝した。

その四年（243年）倭王はまた大夫の伊声耆・掖邪狗ら八人を遣わして、生口・倭錦・絳青縑・緜衣・帛布・丹・木フ　・短弓矢を献上した。掖邪狗らは率善中郎将の印綬を受けた。

その六年（245年）倭の倭の難升米に黄幢（黄色い旗）を下賜し、郡（の太守？）に託して授けた。

その八年（247年）、太守王頎が着任した。倭の女王卑弥呼は、狗奴國の男王卑弥弓呼と以前から不仲であった。倭の載斯烏越らを帯方郡に遣わし、互いに攻撃しあっている（戦争中？）状況を報告させた。（そこで帯方郡から）塞曹エン史張政らを遣わし、詔書・黄幢を持って難升米に与え、檄文をつくって告諭（告げさとす）させた。

卑弥呼は死んだ。（＊）大きな塚（墓）を作った。直径（？）百余歩で、徇葬者の奴婢は百余人。あらためて男王を擁立したが、国中の混乱は治まらなかった。戦いは続き千余人が死んだ。そこで卑弥呼の宗女（＊）壹与（とよ・いよ）年十三才を擁立し女王となし、国中が遂に治まった。政等は、檄文を以て壹与を激励した。壹与は、倭の大夫率善中郎掖邪狗等二十人を派遣して、政等が（魏へ）還るのを見送らせた。そして、台（魏都洛陽の中央官庁）に詣でて、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔・ 青大勾珠二枚・異文雑錦二十匹を献上した。

6. おわりに

とにもかくにも、一年間が過ぎました。振り返ってみると、月一回とはいえ、皆さんと一緒に語りを楽しむことができるのは今の世の中では特筆すべきことと思います。こうして続いているのは皆様のおかげであり、感謝申し上げます。今後とも、この語りを続けていきましょう。これをもってまとめといたします。